

7日目 吉原 -> 蒲原 -> 由比 -> 興津 -> 江尻

吉原宿 14 番目

7日目は吉原宿の富士駅を4月10日、8時にスタート。まだ殆どの店がシャッターを下ろしている商店街を通り抜け、富士川へ。渡船場の跡地に水神社と説明版。昔は急流で難所だったとのこと、現在はもちろん渡船ではなく、富士川橋を渡るが、堰が見え、水量は少ないものの、ところどころ岩が露出していて昔の急流をしのばせる。橋を渡る最中に川面を通して吹き付ける風が非常に冷たく、襟元のボタンを留めて凌ぐが寒い。橋から上流を見上げると富士山、と書きたいところだが雲で見えない。

岩淵1里塚 日本橋より37里



北條新三郎の墓



富士川渡船場跡の説明と水神社



富士川を渡り、これが本当に東海道だろうかと疑ってしまう様な民家の間の幅1m程の石段を上がり、山腹の道をたどって岩淵へ。風は全くなり、日当たりが良く気温は上昇、襟元のボタンを外し袖をまくって、民家の間の、車がやっとすれちがう細い道をたどる。時々車は通るものの歩いている人は無い、しかし、あちこちで鶯の鳴き声が聞こえ、いかにも山中を歩いている雰囲気嬉しくなる。

説明書にこの歩いている所は河岸段丘とあり、そう云えば昔高校の人文地理でそんな言葉がでてきたと考えた途端、金語楼の綽名の先生の顔が浮かび、「人文地理の人文は、じんもんか、じんぶんか、自分はじんぶんと呼びたい」とのせりふを唐突に思い出す。

金語楼先生の本名は覚えていないが、多分生きてはいらっしゃらないだろうな。

坂道を下っていくと、住宅街となり、地図で確認するが合っている模様。前方から10名程度の団体さんが歩いてきて、この道は間違っていないことを知る。

道はやがて東名高速道路と平行し、横断して向こう側に渡る。東名に爆音が響き、見れば20台程のオートバイが群れをなしてツーリング中、多分昔の暴走族の中年バイカーの面々が春の陽気に誘われたものと見える。

「北條新三郎の墓」との案内板があり、記憶に無いものの格好良い名前なので、脇道へ。狭い急な山道を上っていくと、道に蜘蛛の巣がかかっている、訪れる人は少ないことが分かるが、乗りかかった舟で引き返さずに5分程登って墓参り、石碑と説明板があり、武田軍に敗れた北條新三郎自刃の地とのこと。後でインターネットで何者か調べると「新三郎は北條早雲の次男長綱の長男で、武田軍の進攻に備え今川氏応援のため蒲原城に籠った」とあった。

蒲原宿 15 番目

元の東海道に戻り、坂道を下っていくと、蒲原宿の一里塚があり蒲原宿到着、又、駐車場のフェンスに 3 枚の大きなパネルがあって、広重の「夜の雪」と、「義経と浄瑠璃姫」及びその義経と浄瑠璃姫の話を浄瑠璃として書いた作家の小野おつうの絵。 蒲原小町とは浄瑠璃姫のこと。

広重の夜の雪



浄瑠璃姫と義経



作家小野おつう



この蒲原宿は約 1Km と長く、しかも古い家が沢山、良く保存されていて、昔の街道をしのばせる。街道の裏手の御殿山の桜が満開で、地元の「御殿山桜祭り」の最中で賑わっていた。

歩き始めてから 2 時間以上経過しているので、お休み処の看板の民家で一休み。昔妙齡のご婦人が出てきたので、コーヒーの雰囲気ではないなと思い、紅茶を頼んだところ、そのご婦人が話し好きで色々な話が聞け、大正解。まず、このお休み処建物は 180 年前に建てられた旅籠で、現在は市が所有し、NPO が場所を借りて休憩場所として土産物を販売しているとのこと。180 年前の建物の証拠として安政大地震の痕が建物に残っているとのこと、その旅籠の 2 階に上がる。

休憩した昔の旅籠、180 年前の建物



安政大地震で傾いた窓枠と修理した水平の窓



安政の大地震で家が傾き、窓が斜めになっていて(あとから修理した窓は水平なので、元の窓枠とのズレが分かる)、又、隣の部屋の押入れが地震のユレでこちらに50cm程から出っ張っていた。最近畳を敷き直すまでは、畳の上に置いたビー玉が壁に転げたとのこと。インターネットでは、「1854年/安政地震(東海・南海地震、連続発生・死者8千人以上)M8以上」とあった。

又、2階には江戸時代の文物が飾られていて、特に昔の細工の箆笥に赴きがあり、簡単に開けられない為の工夫も面白く、箆笥の上に飾られていた昔の雛人形も可愛かった。奈良の奈良町で見かける、「サル」の人形と同じが吊られていたが、このサル人形は、昔は全国的なものだったということか。この旅籠の前が旧本陣の屋敷、しかし、個人の所有で公開していない。

江戸時代の箆笥と雛人形



薩

サル人形とつむぎ車



蒲原本陣



由比宿 16 番目

蒲原宿を出て1時間程で次の由比宿へ。旧東海道は由比ガ浜沿いに、JR 東海道本線、東名高速、国道1号線と平行しており、初夏の日を浴びながら歩き由比にたどり着く、富士は後方となるが良く見えない。由比宿の中心に七里役所(江戸時代の七里毎の連絡所)があり、その真向かいには由比正雪の生家とされる正雪紺屋で、紺の染物やであり、中を覗くと染物用の壺が埋め込まれた土間となっている。

由比正雪の生家



正雪紺屋の中の土間



何かの時代小説で、子供が染物用の壺に落ちて真っ青になったとの記述があったが、これがその染物用の壺か。しかし小説名もストーリーも全く思い出せず。

その付近で、同じ枝に白とピンクと赤の3色の花を咲かせている一本の小さな桜があり、綺麗で思わず写真。この3色の桜は興津でも見かけた。(博識のS氏の話では桜ではなく南京桃ではないかとの指摘、浅学の身は恥じ入るのみ)

3色のきれいな桜



桜えび

由比のメインストリートは「サクラえび通り」の名前で、この地の名物はサクラえび。町全体が、潮の匂いと魚臭い匂いに染まっている。本日の昼食はM氏推薦のサクラえびかきあげに決め、有名な(と云われている)料亭の玉鉾の暖簾をくぐり、サクラえびかきあげどんぶりを注文、美味しかった、1050円也。

せがい造りと燕の巣

由比の町も古い家が多く、ガイドブックによれば「せがい造り」の家があるとのことで、多分これがその実物と考えて写真、ひょっとしたら違うのかもしれない、家の前の自動車が無ければもっと様になるのに。更に町を歩いていて気が付いたのは、軒下のツバメの巣が多いこと、各家にあると云っても言い過ぎではないほど。奈良に40年住んでいて久しくツバメの巣にお目にかかったことはなかったが、故郷の宮崎では良く見たもの、とすればツバメは海岸近くを好むものなのか。どの巣でもツバメ自体は見なかったがツバメの舞う季節はいつ頃だったのか。



多分せがい造りの家



玄関の上の燕の巣と雛墜落と糞防止

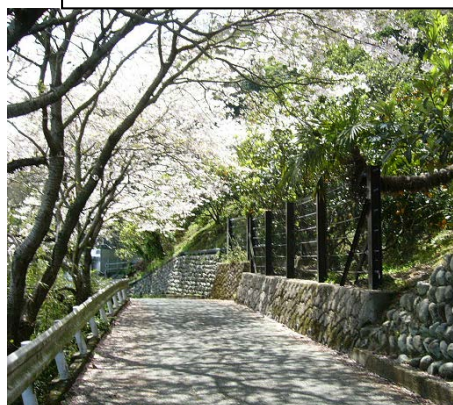


新しい家にも燕の巣

薩埵峠



夏蜜柑とモノレール



左に桜、右に枇杷のトンネル



薩埵峠から見た富士山

由比を後にして難所の薩埵（さった）峠へ。緩やかな登り道を歩いていくと、望嶽亭に着く、ここは富士山の眺めが見事として命名された茶屋の跡とのこと、今は道の駅となっている。しかしその建物自体が邪魔で富士は見えず。難所と言ってもこの程度かと馬鹿にしていたら、この望嶽亭から急な坂道となり、やっぱり難所、息をあえがせながら登っていく、道の右側は蜜柑を植えた急な山腹で、左側は崖となっていて勾配がゆるやかなところにはやはり蜜柑が植えられていて、その蜜柑を運ぶ為に小さな「モノレール」が斜面のいたるところに設置されている。夏蜜柑の木もあり大きな実がぶらさがっている。右側でがさつと音がしたと思ったら、大きな夏蜜柑が木から落ちたらしく足元に転がってきた。これは遺失物か、拾ったら窃盗になるのだろうかなどと考えていたら左側に桜、右側に枇杷の木のトンネルが出現、嬉しくて写真。枇杷の木には小さい実がついているもの、或いは実に紙袋をかぶせているものもあり。この薩埵峠はハイキングの名所らしく上り下りの人が多く、更にバスで麓に来て歩き始め、向い側の麓にバスを待たせているツアーの団体さんもあり、TV用の大きなビデオカメラであちこちを撮影している一隊も。

30分程歩くとよいよ峠へ、確かにこの峠の眺望は絶景。左手には近過ぎず、遠過ぎず程よい大きさの富士、目の前に広がるのは青い駿河湾、その向こうに春霞にかすんで影のように見える伊豆半島、眼下には途切れなく車が走る東名高速と国道1号線、更に東海道本線。感激! 満足!

薩埵峠から東名、1号線、東海道本線



峠の説明板では、こんな山の中でも2度の合戦の場となったとのこと、一度目は足利尊氏とその弟の直義とあるから南北朝の頃、2度目は武田信玄が出てくるので戦国時代、蒲原で見た北條新三郎の墓はこの2度目の戦いの時のもの。

登り始めてから店舗、自動販売機は全くなく、峠で地元の人が売っていた1袋100円の蜜柑を買い、食べながら歩く、6個入っていたが直ぐに食べてしまう、甘露。

今回の東海道ウォーキングでは、ガイドブックの大まかな地図と、インターネットで見つけた「東海道53次手書き地図」、更にヤフーの地図をコピーしたものを持参している。

「手書き地図」は曲がり角などの目印が書かれていて頼りになるが、時々間違いがあり、駅を起点としているので、旧東海道を連続しておらず、書かれていない場所も多い。

ヤフーの地図は詳しく、迷子になることはないものの、旧東海道であるのかどうかは書かれていないので本来の目的、つまり東海道を歩くには最適ではない。結局、ガイドブックと2種類の地図を参照しながら歩くことになる。

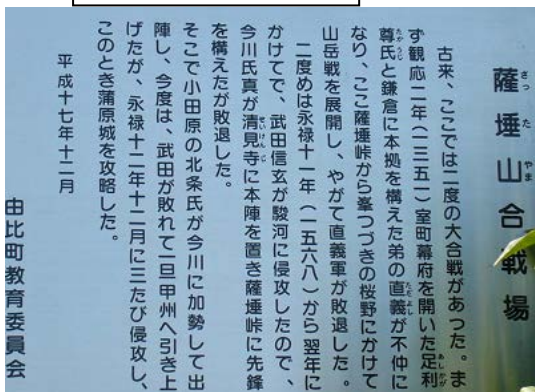
旧東海道を通行中の皆様、両の手に地図を持って歩いているのは多分私です。

この薩埵峠は、ヤフーの地図では峠の先は道が消滅していて、一体どうなっているのだろうか、行けばなんとかなるさと考えていたが、現地には丁寧な道案内があり、途切れることはないほどの人出で、道自体は細い山道であったり、石段であったりするものの、迷う気遣いはない。

薩埵峠の石碑



薩埵峠合戦の説明



足取り軽く下り道をたどり、興津へ、山を出て住宅地の中を通り抜け、興津川を渡り、海沿いの旧国道を進む。

ここで気が付いたが、富士川を越えてからこの興津到着まで5時間程の間、コンビニは一軒もなかった。

教訓: コンビニは有る所には沢山有るが、無い所には全く無い。

高山樗牛の石碑



興津宿 17 番目

途中に興津宿の案内があり、歴史的建造物は見当たらず先に進むと石垣道の途中に「高山樗牛假寓の処」との石碑あり、明治の文人のハズだけど作品は思い出せず。

庭から見たの坐魚荘



市街地を歩き、中心部を通り抜けると左側に「坐魚荘」の標識と古いお屋敷があり、西園寺公望の別荘だったとのことで、入場料無料とのことで立ち寄り、靴を脱ぐのが面倒で建物に入らず、庭から建物を見る。ガラス戸、その内側に縁側、その内側は障子で座敷、昔の典型的な家を見ているよう。規模は異なるものの、昭和 30 年代まではこの様な構造の家は珍しくなかったと思う。

江尻宿 18 番目



稚児橋の河童達



休憩せずに興津宿を歩き抜け、次の江尻宿へ。道は再び市街地となり、地図で通りの名や目印の建物を確認しながら江尻の町に入る、見たいところはあまり無く、江尻の中心地を通り抜け、巴川を渡ると「稚児橋」がかかっている、その橋の 4 隅に河童の像があり可愛らしく写真ひたすら道を急いで、江尻宿と府中宿の

途中となる草薙駅に 17 時に到着、本日の歩いた距離は約 30Km で 5 万歩。

草薙の地名に興味を覚え、インターネットで調べたところ、やはり草薙の剣の草薙で、近くに日本武尊を祭っている草薙神社があるとのこと、次回のスタート時の覗いてみよう。

注：「日本武尊が蝦夷平定のため、東国へ赴く途中、当地で逆賊が起こり、原野に火を放って尊を焼き殺そうとした。そこで尊は出発の折、伊勢神宮に参拝し、倭姫命より戴いた佩用の剣を抜いて、鎌で打ち払うように剣を振り、草を薙ぎ払って難を切り抜けた。後、佩用されていた天叢雲の剣を 草薙の剣 と名称を変更。尊を焼き殺そうとした場所を草薙と言はれるようになったという」薩埵峠を汗びっしょりになって越えたあたりから、「帰ってシャワーを浴び、ビールをキュッと飲む」イメージが頭の中をグルグル回って離れず、で帰って早速実践。

次回は 江尻 -> 府中 -> 丸子 -> 岡部 -> 藤枝 -> 島田を予定

7日目

